

森將軍塚古墳から望む シナノノクニ

矢島 宏雄

一 長野県内の主な古墳の動向

長野県下には、約三六〇〇基の大小の古墳が存在する。主な古墳として、前方後方墳一〇基、前方後円墳（帆立貝形古墳も含め）が五三基を数える。その所在地をみると、千曲川水系善光寺平南部の長野市・千曲市域と、天竜川水系伊那谷の飯田市域の二地域に集中して築造されている。県下の古墳の動向をおおして、森將軍塚古墳やシナノノクニ（注）についてみてみよう。

（注）古墳時代にどのように表記されていたのかわからないため、このように表記した。また「クニ」とカタカナ表記しているのは、大化の改新（六四五年）によって定められた「国」とは異なるため。

（一）県下で最初に古墳が築かれた松本平

古墳の形や規模、築造年代などから、県下で最初に築かれた古墳は松本平にある古墳時代前期前半とされる松本市の弘法山古墳（全長六三mの前方後方墳）である。前方後方墳は、東海地方で創出された墳墓と考えられており、天竜

川水系の飯田市や、千曲川中下流の長野市・中野市・飯山市などにも三〇〇〜四〇〇mほどの規模のものが点在している。

東海地方の文化が東国へ波及する際に、濃尾平野から神坂峠を越え、天竜川をさかのぼり松本平を通って善光寺平を抜け日本海・北陸へ、あるいは松本平から上田・佐久平を通り碓氷峠を越えて東国へと向かったとみられる。今のところ松本平では、弘法山古墳に続く前方後円墳は見つかっていない。

（二）県下最大の前方後円墳が築かれた善光寺平

古墳時代前期中頃には、県下最大の前方後円墳の森將軍塚古墳（一〇〇m）が、善光寺平南部の千曲市の千曲川右岸、比高差一三〇mのありあけ山^{ありあけやま}の尾根上に築かれた。直下に広がる後背^{こうはい}湿地^{しづち}の通称「屋代田んぼ」（更埴条里水田址）では当時から稲作が行われ、千曲川の自然堤防上には人びとの暮らす集落（屋代遺跡群城ノ内遺跡・下条灰塚遺跡など）が営まれていた。その後、屋代田んぼを囲む丘陵部に有明山將軍塚古墳（三二m）・倉科將軍塚古墳（八二m）・土口將軍塚古墳（六八m）が次々に築かれていく。千曲川右岸（旧埴科郡）のこの四基の前方後円墳は、二〇〇七（平成十九）年に「埴科古墳群」として国の史跡に広域指定された。

一方千曲川を挟んで左岸の長野市篠ノ井地区（旧更級郡内）の丘陵部には、前方後方墳の姫塚古墳（三二m）、前方後円墳の川柳將軍塚古墳（九三m）・中郷神社前方後円墳（五三m）・塩崎城見山岩跡帆立貝形前方後円墳（四五m）・



森將軍塚古墳から望む…シナノノクニ（筆者撮影）



弘法山古墳全景（松本市教育委員会所蔵）



森將軍塚古墳直下に水田・集落が広がる（1983年撮影 千曲市教育委員会所蔵）